

# 現場の協力体制構築を

日本政府主導のアフリカ開発会議（TICAD）は今年、第8回目を迎えた。一環として、サカワ・アフリカ財団と国際農林水産業研究センター（国際農研）は、「健全な土壌とアフリカの食料安全保障・環境再生型農業の可能性」をテーマにオンラインシンポジウムを開いた。人口倍増が見込まれるアフリカの多くの地域で土壌が劣化し、食料安全保障を脅かしているからだ。

シンポジウムでは近年、欧米で注目を集める環境再生型農業（RA）のアフリカ



国際農研 情報プログラムディレクター 飯山みゆき氏

## アフリカ版環境再生型農業

### 欧米とアフリカの環境再生型農業比較

	欧米で議論される環境再生型農業	アフリカ型環境再生農業
前提	過剰耕起・過剰施肥による土壌劣化	低土壌肥沃度・低施肥量による低生産性・土壌劣化
実行技術	土壌攪拌を最小化した不耕起による炭素貯留、化学肥料の削減を通じて温室効果ガス排出削減	生物・化学・物理的条件に配慮した土壌管理を通じて、生産性を向上し、森林破壊の回避による温室効果ガス排出削減
期待効果	地球的規模での土壌の健康・食料安全保障の実現	

小規模農業システムでの適用可能性を議論した。RAは、土壌攪拌（かくはん）を最小化した不耕起によって、炭素貯留、

化学肥料の削減や生物多様性の保全、気候変動の緩和に貢献できるとして期待されている。

ただ、RAの化学肥料

## ワールド・ビュー

の低減に関する提言は、大量施肥が進んでいる先進国には有効でも、施肥量が極めて少なく、かつ土壌養分の流失に悩むアフリカでは現実的ではない。

場ですぐに不足する栄養素を判別して補うテラーメイド型土壌肥沃（ひよく）度管理を提案した。

ガーナで不耕起農業センターを創設したコフィ・ボア博士は、急激な人口増が進む中、休耕による環境再生が困難である実態を取り上げ、食に関わる全ての関係者が持続的な土壌管理に向き合う重要性を報告した。

著名な土壌学者のオハイオ州立大学のラッタ・ラル教授は、基調講演で土壌をカーボンの銀行口座と例えれば、作物による養分持ち出しに対し、収支を黒字に維持するために、施肥は必要との意見を示した。

ワージニンゲン大学のケン・ギラー教授は、農業気候土壌学的・社会的条件の多様性によって、万能な技術アプローチはなく、アフリカの農

これらの提言・提案を実現するためには、低生産性・資源制約というボトルネックに直面する小規模農家が土壌管理を実践できるよう、現場での研究・開発・普及関係者の協力体制が求められる。